

第134回くらしの植物苑観察会 2010年5月22日(土)

美術にみる夏草

日高 薫(国立歴史民俗博物館 研究部情報資料研究系)

美術にみる夏の植物

日本人は、古来、四季の移り変わりに敏感で、季節ごとの自然や風物を楽しんできました。植物、なかでも美しい花は、季節を象徴する代表的なモチーフとして、美術工芸品に多くとりあげられています。梅や桜のような春の花、菊や秋草・紅葉のような秋を代表する植物が、装飾的な絵画作品や工芸品の文様に繰り返し描かれています。

四季の中でも、私たちの祖先がとくにこだわったのが春と秋という季節でした。『源氏物語』の中にも登場する「春秋の争い」(春と秋の優劣を議論すること)にみられるように、冬と夏のあいだの変わり目の季節に特別な美意識を認め、春と秋とを対比しながらその魅力を確かめ合ったのです。たとえば四季の自然を描いた図柄であっても、夏や冬の草木が描かれる割合は極端に少なく、春と秋とで、四季全体を表現するという例が少なくありません。

そのような理由から、とくに古代・中世の美術の中に、夏の花がとりあげられる機会は少なかったといえます。しかし、桃山時代から江戸時代にかけて、美術工芸にとりあげられるモチーフが飛躍的に増加してくると、さまざまな特色ある夏の植物が、装飾的な美術を彩るようになってきます。驟雨に打たれる夏草を美しく切り取った酒井抱一の「夏秋草図屏風」(東京国立博物館)はとくに有名ですが、尾形光琳をはじめとする琳派の画家たちの手がけた絵には、実にさまざまな種類の四季の植物が、しばしば対等に描かれており、百合・燕子花・紫陽花・芙蓉・朝顔・芥子・立葵・向日葵などの夏草が活躍しています。この中には、平安時代の和歌等に全く詠まれず、中世までは文様として描かれることのなかった植物も多く含まれていますから、新たに渡来した植物が、春秋にパターン化された季節表現とは異なる新しい感覚の四季のモチーフとして、定着していったのでしょう。

今回は、多彩な夏の花のなかから、燕子花と紫陽花の意匠に注目してみます。

燕子花と菖蒲

燕子花と菖蒲は、いずれも、夏の植物の中では、美術工芸に最も多くとりあげられるモチーフのひとつで、平安・鎌倉時代からすでに登場しています。一言でいえば、描かれた燕子花の背後には文学的な世界、菖蒲の場合は吉祥、もとをたどれば神仙につながる精神世界が、横たわっているとってよいでしょう。

燕子花を造形化した意匠の大半は、在原業平の「からころも きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる たびをしぞおもふ」の和歌で有名な『伊勢物語』9段東下りの一場面に基づくものです。多くの図柄には、燕子花の花と板橋が組み合わせられて描かれますが、ときには、板橋を描かず燕子花の花だけでも、『伊勢物語』の文学世界を連想するほど、造形としての燕子花のイメージは固定化していたようです。

一方、菖蒲（しょうぶ・あやめ）の方は、『万葉集』の時代から一貫して、五月の節句にヨモギとともに挿頭花として邪気を払ったり、根の付いた菖蒲を引いて軒に掛けたりする行事と結びついて、健康や長寿を祈る意味を担っていました。さらに、花菖蒲の文様は、甲冑の染革に好んで用いられ、のちには「勝負」「尚武」の語呂合わせとともに武運長久を願う男性的な意匠として流行しました。

紫陽花と手鞠花

紫陽花は、古代・中世の造形化の例は遺っておらず、近世になって夏草が多く描かれるころに流行し始めたモチーフと推測されます。日本の在来植物で、『万葉集』にも詠まれています。そのイメージは一定しません。花をたくさん集めたような姿が繁栄・永続性という良い意味に用いられた例があるものの、色の移ろいやすさを心変わりにたとえる例もあり、そういうマイナスのイメージが、文様のモチーフとしてとりあげるには不向きと考えられたのでしょう。和歌の世界でも、八代集では一首も詠まれておらず、あまり人気のある花とはいえなかったようです。

ところで、江戸時代には紫陽花を魅力的に表した美術工芸品がたくさん作られますが、その描写には、植物としての紫陽花の特徴を的確に表したとはいえないものが多く見られます。手鞠花と呼ばれるオオデマリやコデマリなど、類似する植物と混同されたものと考えられます。球状の愛らしい花は、多くの花が集まって咲く豊かなイメージでとらえられたのでしょう。

.....

次回予告 第135回くらしの植物苑観察会 2010年6月26日（土）

「農事にかかわる植物たち」 辻 誠一郎（東京大学大学院）

13:30～15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要